

《オ段長音の開合》の崩壊をゆるした背景

— 正宗文庫本『節用集』に登載された二字の漢語から —

樋野幸男

0. はじめに

1. 正宗文庫本『節用集』に登載された二字の漢語にみえるミニマルペア
2. まとめ—推論—

0. 筆者はこれまで《オ段長音の開合》の区別の崩壊／消滅した状況およびその原因について、正宗文庫本『節用集』の漢語(字音語)を中心資料として考察を進めてきた。とりわけ漢語(字音語)・サ行拗音について、樋野(2003a)・(2003b)で実態を検証して、その解釈を提示した。以下にその結語を引用する。

開合の区別が崩壊／消滅した根源的原因はどこにあるか。大づかみに捉えれば、言語運用の効率という視点からは、必要性の低い区別であったからということになる。つまり、音韻体系の複雑さの解消／軽減によって得られる利益が、言語運用の上で生じる同音語の増加による不利益を補完して余裕あるものだったから。それでは、正宗文庫本の字音語・サ行拗音の語は、すべて開音に統一しても、語の同定に支障が生じなかったか。本稿では、数値を示すにとどめておく。字音語・サ行拗音の全125例のうち、本来の開音96例／本来の合音29例。開音が合音の3倍強で、開音に傾斜している。

『日葡辞書』に、発音がよいという意味の「口の開合がよい」という慣用句が見える。開合の“誤り”は、規範に背く表現と見なされた。現代日本語のガ行鼻濁音の問題と同様、言語運用の効率とは無関係に、開合は、言語の美意識の上で重要な指標となっていた。

今後の課題として、開合の消滅による同音語の増加の実態を調査することが要求される。
……(後略)…… (樋野(2003b)99頁、下線は本稿)

これらの考察を基に大胆な推測を述べれば、崩壊／消滅した背景には開合の区別が日常の言語運用の上で当時すでにその効力を失っていたという状況があったと考えられる。

言語、当然ながら音声による言語の運用においては、文字言語の場合と異なって、ある語の同定に必要な条件として、語形が他の語と相異することが好適な条件となる。しかし、コンテキスト(文脈)も同定を支援する材料となる。したがって、まれに同形語(同音語)が存しても、それがいずれの意味を指し示すかは推測可能な範囲内にあるため、大きな支障が生ずることは実際あまりないと考えられる。

さて、オ段長音の開合を形態内部に含む語は、中世末期の時代には和語および漢語にわたっていたが、数量的には漢語がその多くを占めていた。和語でもオ段長音の開合が語の同定にかかわる場合も存するが、本稿ではひとまず漢語の場合に限って考察を進める。

漢語の場合、その多くが漢字2字を基本としているから、以下では正宗文庫本『節用集』の中から2字の漢語を抽出して、その実態を報告する。漢語には2字のもの以外にも、それをベースにして和語と複合したり、その組み合わせから成ったものが多くを占める。また、1字の漢語が語の同定に最も困難といえるのに対して、字数が多くなるほど同定は容易となる。

本稿で調査対象とする文献は、国語辞書という規範的言語を登載した小さなコーパスであり、

語の使用頻度を反映しない資料体ではあるが、同形語が存するか否かの実態を検証するという目的には十分であると判断する。また、この文献に登載された2字の漢語語彙は、その全体から見れば極めて小さな語彙であるが、実際の言語運用においては高頻度の語彙であると考えられる。

《オ段長音の開合》の崩壊をゆるした背景

1. まず、本稿の調査の方法とその結果について述べる。オ段長音の開合の区別が崩壊／消滅へと向かう時代の文献として正宗文庫本『節用集』を採り上げる。山田忠雄(1951)によると、およそ15世紀末から16世紀初頭にかけて書写されたものと考えられる。それに登載された2字の漢語(字音語)の中から第1字・第2字のいずれかがオ段長音である語を抽出した。(本行にある見出し語のみを対象として、割り注に現れるものは除外した。)2字ともオ段長音の語も含まれる。すると、約570語を数えた。さらに、その中に〈オ段長音の開合を対立項とする最小対立語の組(ミニマルペア)〉が存在するか確認した。その結果、16組32語が検出された。なお、〈オ段長音の開合の一致する同形語の組〉も調べたところ、11組22語が見つかった。

以下にそれらの語をすべて掲げる。さきに表の見方を説明する。①～⑦はペアを示す。△は疑問例で、清濁の判断が難しく、上記の16組および11組には含まないが、該当する可能性を否定しきれないペア。「片仮名表記」は見出し語に付された片仮名で、濁点の有無をそのままに標示した。(当該文献では、濁点が丹念に付されている。)ただし、表では「、」を補った。「第1字の音」「第2字の音」は語形を示すため、漢字ごとに現代仮名遣に準じて標示したもので、開合の区別は【開】【合】で明記した。ただし、漢字単独では清音だが、連濁により濁音となるものは、その語形での音を示した。「字音仮名遣」は対立する開合の字音仮名遣で、「○」はそれと片仮名表記の開合が一致するもの、「×」は一致しないもの。また、「備考」には呉音と漢音とが異なっている不審なもの、『日葡辞書』のローマ字表記などを示した。

〔表I〕 オ段長音の開合を対立項とする最小対立語の組(ミニマルペア)

	2字の漢語	片仮名表記	第1字の音	第2字の音	字音仮名遣	所在	備考
①	輕慢	キヤウ、マン	キョウ【開】	マン	○キヤウ	50ウ8(言語)	
	橋慢	ケウ、マン	キョウ【合】	マン	○ケウ	38ウ6(言語)	
②	孝子	カウ、シ	コウ【開】	シ	○カウ	18ウ3(人倫)	
	公私	コウ、シ	コウ【合】	シ	○コウ	41ウ3(人倫)	
③	強盛	ガウ、ジャウ	ゴウ【開】	ジョウ【開】	○ガウ	21オ5(言語)	
	業障	ゴウ、ジャウ	ゴウ【合】	ジョウ【開】	○ゴフ	42ウ3(言語)	
④	三綱	サン、カウ	サン	コウ【開】	○カウ	48ウ4(数量)	
	参扣	サン、コウ	サン	コウ【合】	○コウ	48ウ6(言語)	
⑤	洒掃	シャ、サウ	シャ	ソウ【開】	○サウ	57ウ3(言語)	
	社僧	シャ、ソウ	シャ	ソウ【合】	○ソウ	55ウ1(人倫)	
⑥	修正	シュ、シャウ	シュ	ショウ【開】	○シャウ	54ウ4(時節)	
	殊勝	シュ、シャウ	シュ	ショウ【合】	×シヨウ	57オ1(言語)	
⑦	生死	シャウ、ジ	ショウ【開】	ジ	○シャウ	57オ3(言語)	
	承仕	シャウ、ジ	ショウ【合】	ジ	×シヨウ	55ウ2(人倫)	
⑧	菖蒲	シャウ、ブ	ショウ【開】	ブ	○シャウ	55オ2(草木)	
	勝負	シャウ、ブ	ショウ【合】	ブ	×シヨウ	57ウ4(言語) 62オ6(言語)	シ・セの部に重出
△	西堂	セイ、タウ	セイ	トウ?【開】	○タウ	61オ8(人倫)	漢タウ／呉ダウ、 日ボは「Xeitō.」
	青銅	セイ、ドウ	セイ	ドウ【合】	○ドウ	61ウ6(財物)	

⑨	調法	テウ、ホウ	チョウ【合】	ホウ【開】	×ハフ	44ウ2(言語)	漢ハフ／呉ホフ、 日ボは「Chōfō.」
	重寶	テウ、ホウ	チョウ【合】	ホウ【合】	○ホウ	44ウ2(言語)	呉ホウ／漢ハウ、 日ボは「Chōfō.」
⑩	調鍊	テウ、レン	チョウ【合】	レン	○テウ	44ウ3(言語)	
	長連	チャウ、レン	チョウ【開】	レン	○チャウ	12ウ2(財物)	
⑪	陳防	チン、ホウ	チン	ボウ?【開】	×ハウ	13オ4(言語)	漢ハウ／呉バウ、 日ボは「Chinpō.」
	珍寶	チン、ホウ	チン	ボウ【合】	○ホウ	12オ8(財物)	呉ホウ／漢ハウ、 日ボは「Chinbō.」
⑫	塔婆	トウ、バ	トウ【開】	バ	×タフ	22オ6(天地)	タの部
	東坡	トウ、バ	トウ【合】	バ	○トウ	10ウ4(官名)	
⑬	疲勞	ヒ、ラウ	ヒ	ロウ【開】	○ラウ	59ウ4(言語)	
	披露	ヒ、ラウ	ヒ	ロウ?【合】	×ロ	59ウ2(言語)	「ロウ」慣用音か、 日ボは「Firō.」
⑭	不祥	フ、シャウ	フ	ショウ【開】	○シャウ	40ウ3(言語)	
	不肖	フ、シャウ	フ	ショウ【合】	×セウ	40ウ6(言語)	
△	放家	ハウ、カ	ホウ【開】	カ	○ハウ	5オ1(人倫)	日ボは「Fōca.」
	奉加	ホウ、ガ	ホウ【合】	ガ	○ホウ	8ウ4(言語)	日ボは「Fōga.」
⑮	伯耆	ハウ、キ	ホウ【開】	キ	※ハク	4オ6(天地)	
	蜂起	ホウ、キ	ホウ【合】	キ	○ホウ	8ウ5(言語)	
⑯	芳恩	ハウ、ラン	ホウ【開】	ラン	○ハウ	6オ2(言語)	
	報恩	ホウ、ラン	ホウ【合】	ラン	○ホウ	8ウ4(言語)	

〔表Ⅱ〕オ段長音の開合の一致する同形語の組

	漢字表記	片仮名表記	第1字の音	第2字の音	字音仮名遣	所在	備考
⑰	砂糖	サ、トウ	サ	トウ【開】	×タウ	48ウ2(飲食)	
	左道	サ、トウ	サ	トウ【開】	×タウ	49オ4(言語)	
⑱	山椒	サン、シャウ	サン	ショウ【合】	×セウ	47ウ3(草木)	
	三笑	サン、シャウ	サン	ショウ【合】	×セウ	48ウ3(数量)	
△	賞翫	シャウ、クワン	ショウ【開】	クワン?	○シャウ	57ウ3(言語)	日ボは「Xōquan.」
	庄官	シャウ、グワン	ショウ【開】	グワン	○シャウ	55ウ5(人倫)	日ボは「Xōquan.」
⑲	周防	ス、ワウ	ス	ワウ【開】	○ハウ	62ウ2(天地)	
	蘓枋	ス、ワウ	ス	ワウ【開】	○ハウ	62ウ6(草木)	
⑳	西浄	セイ、ジャウ	セイ	ジョウ【開】	○ジャウ	61オ4(天地)	
	誓状	セイ、ジャウ	セイ	ジョウ【開】	○ジャウ	62オ3(言語)	
△	誕生	タン、ジャウ	タン	ジョウ【開】	○シャウ	23ウ3(言語)	
	彈正	タン、ジャウ	ダン?	ジョウ【開】	○シャウ	22ウ8(官名)	漢タン／呉ダン
㉑	丁子	チャウ、ジ	チョウ【開】	ジ	○チャウ	12オ3(草木)	
	停止	チャウ、ジ	チョウ【開】	ジ	○ヂャウ	13オ4(言語)	
㉒	帳臺	チャウ、ダイ	チョウ【開】	ダイ	○チャウ	11ウ8(天地)	
	頂戴	チャウ、ダイ	チョウ【開】	ダイ	○チャウ	12ウ8(言語)	
㉓	肇歳	テウ、サイ	チョウ【合】	サイ	○テウ	44オ2(時節)	
	調菜	テウ、サイ	チョウ【合】	サイ	○テウ	44ウ2(言語)	

㉔	徒黨	ト、タウ	ト	トウ【開】	○タウ	10ウ1(人倫)	
	渡唐	ト、タウ	ト	トウ【開】	○タウ	11ウ2(言語)	
㉕	坊士	バウ、ジ	ボウ【開】	ジ	○バウ	5オ2(人倫)	
	忙仕	バウ、ジ	ボウ【開】	ジ	○バウ	5オ2(人倫)	
△	蒲萄	フ、ダウ	ブ	ドウ【開】	○ダウ	39ウ5(時節)	
	無道	ブ、タウ	ブ	トウ?【開】	○タウ	40ウ3(言語)	漢タウ/呉ダウ、 日ボは「Butō.」
㉖	名荷	ミヤウ、カ	ミョウ【開】	ガ	○ミヤウ	53オ6(草木)	日ボは「Miōga.」
	冥加	ミヤウ、ガ	ミョウ【開】	ガ	○ミヤウ	54オ1(言語)	
㉗	夜盗	ヤ、タウ	ヤ	トウ【開】	○タウ	36オ7(言語)	
	夜討	ヤ、タウ	ヤ	トウ【開】	○タウ	36オ8(言語)	

さて、オ段長音の開合の区別の崩壊/消滅によって〔表Ⅰ〕の最小対立語の組(ミニマルペア)は〔表Ⅱ〕の同形語の組と同様に対立項を失ってしまった。言い換えると、次のようになる。

I類. 開合の区別の崩壊/消滅によって同形語になったペア

II類. 開合の区別の崩壊/消滅にかかわらず同形語であったペア

以前から同形語であったII類が言語の運用に際して多少の混乱を生じていたとしても、それでもコミュニケーションは成立していたはずである。開合の区別の消滅がI類に与えた損害は否定できないが、意思の伝達を阻むほどの脅威ではなかったといえよう。

2. 正宗文庫本『節用集』に登載された2字の漢語を検討すると、オ段長音の開合を対立項とする最小対立語の組(ミニマルペア)は、オ段長音の開合を構成要素とする漢語570語ほどの中から16組32語が抽出できた。それは全体の6%弱にあたる。さらに2字の漢語全体をベースに考えると、その割合は極めて小さなものとなる。また、開合の区別の崩壊/消滅によって同形語となった場合も、アクセントが相異なる可能性があった。したがって、崩壊/消滅の前後における言語運用の効率は、ほとんど変動がなく、不都合は生じなかったと推測できる。

オ段長音の開合は中世末期に崩壊して、その後は一部の芸能集団によってその発音が継承された。^{注3} 開音/合音は[アウ/オウ]から推移して[オー/オウ]に至ったと考えられるが、開合の対立は、古代~中世~近代と日本語が変化していく中で、過渡的に出現した音の対立であった。現代でも[オー/オウ]はともに音声として出現するし、ほかに[エー/エイ]も交替するが、音韻論的には対立しない。中世末期の時代において、開合は余剰的な言語現象であり、“危険防止の安全装置”であった。

注

1. この文献中に、和語では157語が検出できる。
2. 調査には、ノートルダム清心女子大学古典叢書別冊1『正宗文庫本 節用集』を利用する。
3. 筆者は、開合の崩壊/消滅の過程について、樋野(2003b)で次のように述べた。

さて、石井(1977)は〈開合の混乱〉に3つの段階を想定している。第1の「本来合音である語が個別的に誤って開音に発音される」という段階では〈音韻体系の対立項として開音/合音を明確に認識している〉ことが前提となる。第2段階も同じ前提の下での進行した状況であるが、第3段階は前提が完全に消滅した状況で、まさに開合の区別の崩壊した段階である。以下に、本稿の修正案を掲げる。

- 【0】開音／合音の対立を認識して、個々の単語を"正しく"発音できる。
 【1】開音／合音を音韻体系の対立項として明確に認識しながら、個々の単語のレベルで、いずれか判断し難いものがある。
 【2】第1段階が進行して、対立項としての意識がありながら、多くの単語について判断が困難である。
 【3】対立項としての意識は消滅したが、[o:]／[ou]が"異音"として併存する。
 【4】対立項としての意識が消滅して、[o:]／[ou]もいずれかに合流する。

本稿では、新規に第3段階(【3】)を設定した。その理由は、対立項としての意識はなくとも、2つの音が選択可能な"異音"として併存した状況が、過渡的な段階として不可避免的に生じたとするのが自然だからである。なお、謡曲など芸能の世界で、第4段階に推移して以降も、2つの音を区別しようとするのは、第3段階で、日常は"異音"が無意識的に選択されたのに対して、謡曲では伝統に支配されて旧来の〈開合〉に合わせて意識的に発音されたからと考えられる。(97頁)

参考文献

- 山田忠雄(1951)：橋本博士以後の節用集研究(『国語学』第5集)
 正宗甫一・室山敏昭(1968)：正宗文庫本「節用集」解題(ノートルダム清心女子大学古典叢書別冊1『正宗文庫本 節用集』)
 石井みち江(1977)：「室町時代物語」の表記に見る開合音の消滅過程(『国語学研究』17)
 樋野幸男(2001)：《オ段長音の開合》研究史抄(『東海学園 言語・文学・文化』第1号)
 ——(2003a)：正宗文庫本『節用集』にみえる《オ段長音の開合》標示の偏向一字音語・サ行拗音について、大谷大学本との対照から一(田島毓堂・丹羽一彌 編『日本語論究7 語彙と文法と』、和泉書院)
 ——(2003b)：正宗文庫本『節用集』にみえる《オ段長音の開合》標示の解釈一字音語・サ行拗音の偏向から、研究史をたどりつつ一(田島毓堂・丹羽一彌 編『名古屋・ことばのつどい言語科学論集』、名古屋大学大学院文学研究科日本語学研究室刊(富山大学助教授))